

# 第32回(令和7年度) 千葉県建築文化賞 表彰作品集



主催：  千葉県

共催：  一般社団法人 千葉県建築士会

# 千葉県建築文化賞について



千葉県知事 熊谷 俊人

令和7年度の千葉県建築文化賞に多くの皆様から御応募を賜り、誠にありがとうございました。

本賞は、建築文化及び居住環境に対する県民の皆様の意識の高揚と、うるおいとやすらぎに満ちた快適なまちづくりを推進することを目的として平成6年度に創設されました。

第32回となる今年度は、48点もの御応募をいただきました。

その結果、千葉県建築文化賞検討会議による検討内容を踏まえ、最優秀賞1点、優秀賞4点及び入賞3点の合計8点を選定したところです。

受賞作品は、新築の建物から既存ストックを有効活用したもので多岐にわたり、周辺環境との調和や自然環境への配慮に優れたもの、人々が集い憩う快適な空間を創出したもの、地域の再生や交流を促す場所など、いずれも千葉の魅力を高め、地域の活性化に大きく貢献するまことに素晴らしい作品ばかりです。これらの建築物が、今後も地域社会の中で親しまれ、本県の建築文化の向上と、より良いまちづくりの推進に寄与していくことを心から期待しています。

県としましては、誰もが安心して快適に暮らすことができる住まいづくりや、歴史的文化や景観などの地域固有の資源や地域特性を生かした多くの方々に選ばれる魅力あふれるまちづくりを進めてまいりますので、引き続き御理解と御協力をお願いいたします。

結びに、受賞者並びに御応募いただいた皆様のますますの御活躍をお祈り申し上げまして、あいさついたします。

令和8年3月

## 目次

千葉県建築文化賞について	1	MICHIYA	8
第32回千葉県建築文化賞選考経過と総評	2	ReISEU 3 BLD.	8
仲井町の家	3	床と光の家	9
麗澤大学 校舎さつき	4	選考の基準	9
三山の看・学・医 地域ケアコンプレックス	5	第32回千葉県建築文化賞検討会議	9
Yn/h	6	千葉県建築文化賞の実績(応募総数・受賞作品数)一覧	10
増減の家	7	受賞作品の位置	10

# 第32回千葉県建築文化賞選考経過と総評

## 応募48点から8点を表彰



千葉県建築文化賞検討会議委員長 岡部 明子

### (選考経過)

第32回千葉県建築文化賞は令和7年5月の第1回検討会議で募集要領を定め、7月上旬から9月下旬まで応募・推薦を受け付け、総数48点の応募をいただいた。(部門別内訳は下表のとおり。)

県内の建造環境の状況を鑑みると応募があってもよいように思えるが、出揃った建築物の多くがそれぞれに魅力的なものだった。応募していただいた皆さまの熱意に深く感謝したい。

10月に第2回検討会議を開催し、書類による一次選考を行った。すべての応募用紙を一堂に展示し、その記載と写真等をもとに投票を行い、現地調査の対象とする一般建築物6点、住宅6点を選んだ。次いで11月の3日間かけ、現地を訪問し、建築物の説明を伺いながら詳細に調査した。二次選考は12月開催の第3回検討会議で、現地調査の報告を踏まえて、投票を交えながら討議を重ね、優れた建築物を選んだ。

なお、今回も選考の公明性を保つため、委員と関係のある応募建築物などについては、そのことを確認したうえで、当該委員は討議に参加せず、票を投じないこととした。

その結果、最優秀賞1点、優秀賞4点、入賞3点を表彰候補対象として決定した。

募集部門	選考経過	応募総数	現地調査 (一次選考)	受賞作品選定(二次選考)		
				最優秀賞	優秀賞	入賞
一般建築物		24	6	0	2	1
住宅		24	6	1	2	2
合計		48	12	1	4	3

### (総評)

今年度は、一部の例外を除いて比較的規模の小さい建物の応募が多く、社会状況の変化を受けてスキマ的必要性を埋める建築的試みが目立った。建築物として質の高い物的環境を創出することに貢献できているところのみならず、建築プログラムとして今後の発展性が見込める点も十分に考慮し慎重に議論した。

優秀賞の「麗澤大学 校舎さつき」は、文系の学部からなる大学だったところに工学部が新設されたのに対応して建てられた新校舎である。建設コスト高騰の影響を受けながらも、環境面、構造・構法面で新技术を積極的に取り入れ、心地よい空間を創出している。本校舎新設にともない行われたランドスケープの改変により、キャンパス内の人の流れを大きく変え、さまざまな学部の学生が思い思いに過ごす屋内外の場の創出に成功している。

同じく優秀賞の「三山の看・学・医 地域ケアコンプレックス」では、個人医院の移転新築を機に、従来の診療所機能を拡張し、2階には訪問看護ステーション、3階にはカンファレンス兼休憩室を設けている。3階は、屋上テラスに開かれた開放的な部屋で、ケアに携わる地域の人たちの集まりにも使われているという。まちのお医者さんが地域ケアのハブに発展していく姿を建築的に表現している。

入賞の「MICHIIYA」は、駅前商店街がマンションに置き換わっていくなかで、一軒の歴史ある商家を残そうという当事者の強い意志から、地域の人びとの意識が変わりうる希望を見せてくれている。

今回は、例年以上に今日の住環境のあり方について考えさせられる住宅が多かった。

最優秀賞の「仲井町の家」は、母屋と離れて構成された設計者の自邸である。ごく普通の規模の宅地の区画だが、南に10mほどの崖下に公園が広がっていることをうまく活かしている。北側道路に面した小さな離れは、現在事務所として使われているが、街に開いた集いの場になっていきそうな期待をもたせる。一般に、より高い環境性能を求められるようになり、窓の少なく外と絶縁した住宅が増える傾向にあるなか、外に開いて風を通し、もっとも気持ちいい季節を満喫できる住宅を実現させている。細部の端々まで施工の美しさが行き届いている。

優秀賞の「増減の家」も設計者の自邸だが、ZEHに適合しながら、開口部を大きくとり半屋外空間と一体となった居間での生活が、手の届くコストで不可能ではないことを示している。ゆるやかなマウンドで神社の参道と隔てつつつなげることに成功している。「Yn/h」は、先祖が植えた杉の木50本ほどを構造材から仕上げ材までに無駄なく使い切っている。国産木材を建材として見直し産業化する潮流にあって、伐採、運搬、乾燥、製材、そして家になるまで地域で当たり前にあったしくみが消えていくことへの静かな警鐘である。

以上3つの住宅には、三者三様の環境への配慮が伺えた。自然環境の循環から切り離して負荷を低減することなのか、それとも逃れることのできない循環に人間のつくった建築を埋め込み直すことなのだろうか。

入賞の「ReISEU 3 BLD.」は、全国各地で持て余している築50年超のRC壁式共同住宅の改修で、耐震性を上げるために床スラブの一部を解体し出現したワイルドな空間で新たな入居者を招く試みである。「床と光の家」は、各階の床や居室の概念を一旦解いて一体的な空間に再構築することに挑んでいる。

一般建築物の部

住宅の部

# 最優秀賞

住宅の部

建築主：秘匿

設計：鈴木雅也建築設計事務所

施工：有限会社タケワキ住宅建設

所在地：松戸市

～自然と人の生活の結びつきで居場所をつくる～

## 仲井町の家



北の間から中庭を介して中の間、南の間と公園の緑を眺める。

公園に隣接する設計者の自邸である。中庭を挟むように道路側に小さな平屋の離れがある分棟形式である。

街への圧迫感をなくす佇まいが、北側の前面道路の明るさを増している。中庭は一般的な配置である隣家への通風や採光にも思いがけず寄与しているだろう。逆に、公園側にはかなり迫る配置となるが、広い公園の前に、フェンスに囲まれた地盤レベルの庭を作るのではなく、FLよりも高い位置に濡縁を設けることで公園全体を貸し切るような潔い設えである。

通り側から住宅を見たときの、小さな屋内、中庭(小さな屋外)、大きな屋内、公園(大きな屋外)という層状の重なり風景が細やかに設計されている。具体的には、陰影の変化(陰影の階調が映える白い壁、陰影を邪魔しない開口や壁端部の納まり等)、床高の変化とその変化に参加する什器たち(踏み台を兼ねる収納、設備を兼ねる収納、重心の低いペンダント照明、高さを抑えたストーブ裏のCBの腰壁等)、窓の種別の変化(眺望/採光/換気の役割分担をする窓、中庭に面す

る窓を特に大きく、という操作等)など、さまざまな建築的操作によって、風景を豊かにし、居場所を作り出している。それ以外にもトップライトから光の移ろいを感じられるささやかな休憩スペースなど、自然と人の生活の結びつきが丁寧に設計されている。

離れは現在仕事場として利用されていて、今後公私両用での利用が可能な状態とのことである。広さや前面道路とのつながりに、公としての活用方法にどれほどの選択肢が生まれるか、今後の展開に期待したくなる建築である。(海法 圭)



高台下の公園から外観を見る。



道路から母屋へのアプローチ。

(撮影全て:鈴木 研一)

優秀賞

一般建築物の部

建築主：学校法人廣池学園

設計：KAJIMA DESIGN

有限会社 上野・藤井建築研究所

一般社団法人 キャンパスとまち計画研究所

施工：鹿島建設株式会社 東京建築支店

所在地：柏市光ヶ丘2-1-1

～出会いと学びが交差する新たな共創の空間～

# 麗澤大学 校舎さつき



西側外観・おおらかなエントランス大庇・開かれた大教室

麗澤大学 校舎さつきは、緑豊かなキャンパスにおいて、今までまちとのつながりが比較的希薄であった南柏駅に面する北側の敷地に、新たに新設される工学部の活動拠点施設として、新校舎及びランドスケープを整備したプロジェクトである。新校舎は、学園の建学の精神に基づき「共創」をキーワードに新たな大学の顔となる建築が目指された。「共創」の建築的表現は、「共創の場となる学習環境づくり」、「環境共生型キャンパスの実現」をコンセプトに、様々な場において大学活動の可視化や交流の誘発、活動の変化に対するフレキシビリティの確保がされている。1階は、学生や教職員が日常的に集うLearning Hallがあり、上下階の交流を促進するため、各所に共創する人数に応じた吹抜空間を設け、交流の機会を自然に生み出す工夫が随所に計画されている。また、大型実験室は、大学の研究活動の場に加え、地域に開放されフォーラムやヨガ教室などが開かれている。新校舎は、工学部の活動拠点施設であ

るが、他の学部 of 学生も利用可能で、文理融合総合大学の象徴的な建物となっている。その他、木を使った新構法の活用や省エネのための環境配慮技術の導入、自然環境に対しては、キャンパス内校舎で利用する井水の利用率より多い雨水を、緑地やレインガーデン等から地下水へ還元することでネットゼロウォータービルにする等、新校舎は環境共生型キャンパスの実現の一翼を担っている。これらの複雑な要素を秩序立てて計画・設計し、それを施工した建物の施工精度もよい。麗澤大学 校舎さつきは、学園の建学の精神を具現化した質の高い学びの場が実現されている。

(鈴木 弘樹)



キャンパスの主動線へ生まれ変わった「新たな顔」



3方向にアクティビティが開く木質空間・大教室

(撮影全て：石黒写真研究所 塩澤 貴弘)

優秀賞

一般建築物の部

建築主：医療法人社団恵心会  
設計：株式会社千田建築設計  
施工：株式会社末吉林業  
所在地：船橋市三山8-1-2

～暮らしに寄り添う地域医療の拠点～

## 三山の看・学・医 地域ケアコンプレックス



元軍用道路の商店街の一角に「赤ちゃんから看取りまで」包括的に一次医療を届ける地域医療拠点としての診療所の再整備

(撮影:Luuk Kramer fotografie)

この建築は、医療施設でありながら、どこか「暮らしの延長」にあるような安心感をまとっている。その印象は決して雰囲気づくりによるものではない。地域の現実と真正面から向き合いながら積み重ねられた検討が、空間のあり方として自然に結実しているためである。

商店街と住宅地が混ざり合う場所で、長年地域医療を担ってきた診療所が新たな拠点を構えるにあたり、求められたのは単に「診る」場ではなかった。通い、訪ね、支え合い、学び合う医療のかたちを、いかにこの場所に根づかせるかという問いである。本計画は、その複雑で繊細な要求を丁寧にカタチにしている。

敷地内に設けられた路地は、医療動線を担いながら、同時に地域の日常へとひらかれる可能性を内包している。内部空間には木の質感に包まれた、リビングのような落ち着きが広がる。診療所にありがちな緊張感は和らぎ、ここで誰かの話を聞き、誰かを待ち、誰かと相談する時間が自然に想像できる。「医療の場は、安心の場であってほしい」

という思いが、設計の隅々まで行き届いている。三層に重なるプログラムも見事である。外来、訪問診療、訪問看護、そして学びと休息の場は、視線や気配、音によって緩やかにつながり、医療を支える人と人との距離をそっと縮めている。特に3階のカンファレンスルームは印象深く、医師や看護師、ケアに関わる人々が集い、考え、語り合う姿が目に見え、

この建築は単なる施設にとどまらず、地域の未来を支える拠点として静かに佇んでいる。派手さはないが、時間をかけて地域に根を下ろし、人々の記憶に染み込んでいく強さがある。今後どのように育っていくのかを、見届けたい。

(加藤 未佳)



3階：打ち合わせ、休憩所、医療関係者が集まる勉強会など様々に使われる、コンプレックスを支えるコモン

(撮影:Luuk Kramer fotografie)



1階：落ち着きある真壁のインテリアがどこまでも続く、家のように安心感を感じさせる医療空間を目指した

(撮影:千田 友己)

優秀賞

住宅の部

建築主：A氏  
設計：株式会社和田吉貴建築事務所  
施工：株式会社ひらい  
所在地：袖ヶ浦市

～紡ぎ伝えるものとして～

Yn/h



南東外観

本作は、28代続く家系の系譜と地元の風土を、自らの手で編み直した極めて純度の高い建築実践である。

施主は長年、海外勤務を含む広範な官舎暮らしを経験してきたが、最終的に「終の棲家として穏やかに暮らす」場として選んだのは、先祖が守り継いできた杉の山であった。本作の最大の特徴は、構造材はもとより、外壁や内装に至るまで、ほぼすべての木材を自前の山から調達している点にある。自ら山に入り、木を選び、建築へと昇華させるプロセスは、単なる地産地消を超え、家系が土地に刻んできた時間の継承そのものである。

空間構成においては、トップライトから光が降り注ぐ土間が中心的な役割を担っている。この土間は、農作業の延長として活用できる実用的な屋内空間でありながら、各世帯の生活スタイルの独立性を尊重しつつ、緩やかな一体感を生み出す装置として機能している。母親と過ごす二世帯住宅としての距離感を、この中間領域が見事に解決していると言える。

また、意匠的な配慮も地域への眼差しに満ちている。夜間、北側に設けられたハイサイドライトから漏れる光は、まるで行灯のように周囲を照らし、地域社会に対してほのかな温もりを感じさせている。

自らのルーツである「杉」という資源を核に、現代の暮らしと伝統的な農の営みを融合させたこの住まいは、ストック活用の時代において、個人がなし得る最も贅沢で誠実な建築のあり方を提示している。

(久富 清敏)



北面外観



エントランスホール

(撮影全て：株式会社エフジー武蔵)

## 優秀賞

住宅の部

建築主：鹿内 健・鹿内 真沙子  
設計：Sデザインファーム株式会社  
施工：株式会社ニッター住宅  
所在地：船橋市

～「増やす豊かさ」と「減らす豊かさ」を謳歌する住宅～

# 増減の家



外観

住宅を設計する場合、その土地がもつ文脈や住まい手のライフスタイルを理解し、空間や機能がどのように寄り添うかを考えることが重要である。

「増減の家」の敷地は、神社の参道に面した建築家の自邸である。この敷地において、緑豊かな神社の参道空間や日本古来から連続と続く神道の考えを無視して設計することは考えられない。自然は、人間に恵みを与える一方、猛威をふるう。

設計者は、「暮らしの豊かさ」は何かを自ら問い、その一つの答えとして「増やす事での豊かさ」と「減らす事での豊かさ」がある住宅に見出し、その意味を込めて「増減の家」と名付けた。その考えは、「内の部屋」と「外の部屋」に明確に表現されている。「増やす事での豊かさ」は、「内の部屋」で、トリプルガラス等を採用した高断熱・高気密(断熱等級6)で、屋根に6kwの太陽光パネルを載せたZEHのコントロールされた「内の部屋」である。一方、「減らす事での豊かさ」は、

「外の部屋」で、参道側に大きく屋根を伸ばし、室内の雰囲気が残る屋根下の自然の表情を謳歌できる半屋外のコントロールされない「外の部屋」である。参道との境界部分は、建設残土を活用しマウンドとし、植栽が参道側の緑と連続している。視線を制御する庭の起伏と垂れ下がるサッシで囲われた空間は、自然と人工物が程よく交じり合う心地よい空間である。また、内外を区切るサッシを開放すると「外の部屋」と「内の部屋」が一体化される。このコントロールされた「内の部屋」とコントロールされない「外の部屋」がクロスする住宅において、人にとっての「暮らしの豊かさ」の一つの答えがここに提示されている。(鈴木 弘樹)



室内から屋外を見る



内外が連続した外リビング

(撮影全て:Yasu Kojima)

## 入賞

一般建築物の部

建築主：吉野 路子  
設計：株式会社NLデザイン設計室  
施工：有限会社竹内ホームテクノ  
所在地：習志野市津田沼5-10-9

～街と人をつなぐ。商店街が生まれ変わるきっかけになる～

# MICHIYA

対象地は習志野市の駅前商店街の入口にある。明治から150年続く商家の建物を建主が引き継ぐことになったことから10年前に改修計画が始まる。周辺の商店は商売を諦め、賃貸ビル等に建て替えが進み、商店街の活気がなくなりつつあった。商店街のアーケードは天候によらず街の人が行き交い賑わっていたはずだが、老朽化と商店の減少で存在意義を失っていた。だが、建物改修に合わせてアーケードを撤去することで建物外観が現れ、街の人々が目をむけることとなった。

建物は分棟形式に整理し、通りに面した外壁をセットバックした。軒下空間が建物の間で連続することで、通りから敷地内に



改修後の様子・近景



室内の様子

路地ができた。路地を常に開放するのは難しい面もあるようだが、建物をレンタルルームに活用し、路地でイベントが行われるなど、かつてのアーケードの役割の一旦を担えるような、街の人も立ち寄れる場所となっている。

受け継がなければ変わってしまう状況から、受け継ぐことで生まれる、小さな取り組みの積み重ねが今も続いている。この10年で生まれた「街と人と建物のつながり」を評価したい。軒下空間や路地の更なる活用を継続し、街の人々を巻き込みながら記憶に残る新たな商店街の顔となることを期待している。

(藤本 香)

(撮影全て：丹羽 修)

## 入賞

住宅の部

建築主：有限会社イセウ  
設計：Sデザインファーム株式会社  
施工：株式会社小原建設  
所在地：松戸市緑ヶ丘2-350

～既存ストック活用のあり方提案～

# ReISEU 3 BLD.

駅近の賃貸共同住宅という立地条件ながら、あえて床面積を削減するという不動産的には「逆の発想」を選択している点が興味深い。この減築によって耐震性の向上を図るアプローチは、当時の構造計算書が現存していたという幸運も重なり、精度の高い構造検討に基づいた説得力のある改修計画へと繋がっている。

また、予算の制約の中で断熱性能をいかに担保するかという課題に対し、居住エリアを限定して手を入れる手法でコスト削減に苦心した跡が見て取れる。こうして生まれた吹き抜け空間は、借り手の自由な発想や多様なライフスタイルを引き出す契機として機能している。

一方で、建物の安全性という観点では、解体後の表面の仕上げの荒さや、新設された吹き抜け周辺の安全対策において依然として課題を残している。

また、庭が前面道路に面しない構成上、屋外空間とまちとの視覚的・機能的な連続性は希薄であるが、住まい手による自由な使いこなしを許容している。

人口減少が進む郊外における既存ストック活用のあり方を、現実的な制約の中から鮮やかに提示しており、既存ストックのポテンシャルを構造・熱環境・空間の自由度という多角的な視点から再構築した、示唆に富む実践である。

(久富 清敏)

(撮影全て：鳥村 鋼一)



キッチン住戸の吹き抜け



外観

# 入賞

住宅の部

～ニュータウンの環境に対峙する清々しい住まい～

## 床と光の家

建築主：N氏

設計：株式会社高池葉子建築設計事務所

施工：株式会社21世紀工務店

所在地：八千代市

ニュータウンの一角で、四方を住宅に囲まれる敷地での住まいのあり方を考えた住宅である。

帯状耐力壁を配置することと開口を開くことが同時に起こっているような、建築の成り立ちがそのまま風景として立ち現れている様子が清々しい。真壁造であることも相まって、柱と壁と窓だけで建てたように見える素直さだ。

小さな空間が積み木のように重なり、それらがずるずるとつながることで立体的なワンルームになっている。1日を通して変化する多様な光に満ちた住宅であるが、それ以上に家族の過ごし方や隣室との関係の調停に応じて、視線の通り方や光・風のまわり方が繊細に変動する面白さがある。接合金物が露出しない接合部や内外からの視線に配慮した開口など、総じて住まい手の身体性を大切にしたい高い設計密度が評価された。



ダイニングからリビングを見る。素材の異なる開口部からの光が時間の移ろいと共に、多様な居場所を生む。

一方でルームそれぞれの小ささの是非は議論となった。小ささゆえに過ごし方の選択肢を狭める可能性についてだ。家族の過ごし方に細やかに対応すると小さな部屋の数が増えることは、ニュータウンで生活する核家族にとって必然とも言える一方で、また別のローカリティもありうるのだろうか。今後、家族の生活と共に、住宅や空間の使われ方も育まれていくであろう姿に期待したくなる建築である。

(海法 圭)

(撮影全て:中村 絵)



南西側から見る。周辺からの視線を考慮した高さ連続水平窓・ポリカーボネート中空板を配置。

### 選考の基準

次の事項を選考の基準とし、総合的に審査します。

- デザイン性に優れていること
- 安全で快適な建築空間を創出していること
- 防災への配慮がなされていること
- その他、独自の取組や提案がなされていること
- まちなみや周辺の景観と調和がとれていること
- 環境負荷の低減に配慮していること
- 施工上優れていること

※建築基準法等の諸法令に適合しており、かつ近隣等との紛争が生じていないこと等も含む。

### 第32回千葉県建築文化賞検討会議

【敬称略 委員は五十音順】

委員長 岡部 明子：東京大学大学院教授

委員 海法 圭：建築家

副委員長 藤本 香：環境デザイナー、  
千葉大学特任教授

委員 加藤 未佳：日本大学教授

委員 鈴木 弘樹：千葉大学大学院准教授

委員 久富 清敏：一般社団法人千葉県建築士会会長

第32回千葉県建築文化賞に御応募いただきました皆様に厚く御礼申し上げます。  
応募総数48点の中から最優秀賞1点、優秀賞4点及び入賞3点の、合わせて8点が選定されましたが、応募作品はどれも優れた特徴をもった質の高い作品でした。  
作品に携わられた皆様に敬意を表し、今後ますますの御活躍を期待しております。

千葉県建築文化賞検討会議事務局



チーバくん

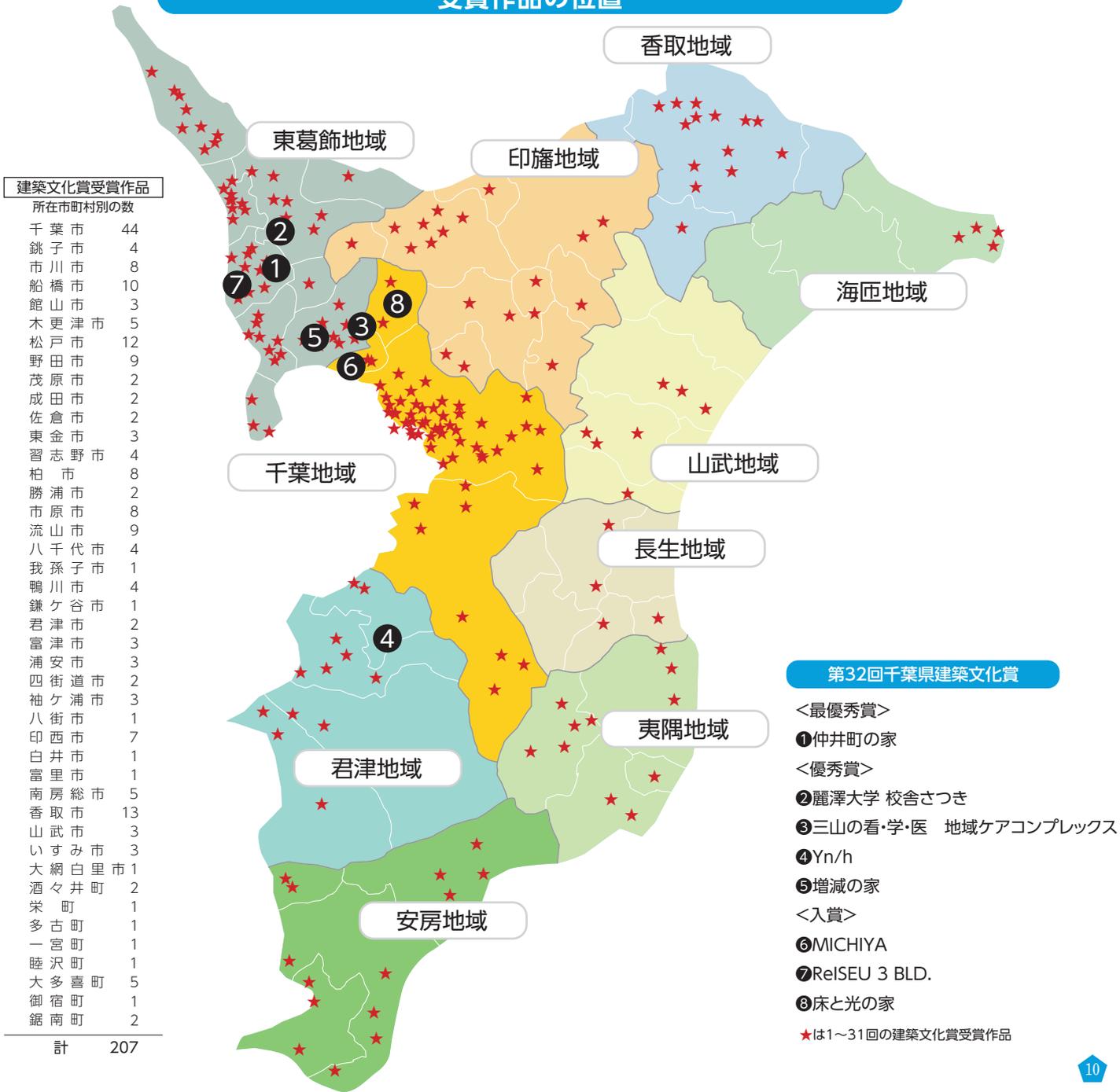
# 千葉県建築文化賞の実績(応募総数・受賞作品数)一覧

回数	年度	応募総数	建築文化賞			建築文化奨励賞
			部門		合計	
1~19回計 (H6~H24)		1,600	景観上優れた建築物の部	46	96	58
			ユニバーサルデザインに配慮した建築物の部	26		
			環境に配慮した建築物の部	24		
20	H25	68	一般建築物の部	4	6	2
			住宅の部	2		
<b>1~20回計</b>		<b>1,668</b>			<b>102</b>	<b>60</b>

回数	年度	応募総数		部門	建築文化賞			
		部門別内訳			最優秀賞	優秀賞	入賞	合計
21~30回計 (H26~R5)		657	384	一般建築物の部	8	25	25	58
			273	住宅の部	5	16	9	30
31	R6	56	32	一般建築物の部	1	2	3	6
			24	住宅の部	1	0	2	3
32	R7	48	24	一般建築物の部	0	2	1	3
			24	住宅の部	1	2	2	5
<b>21~32回計</b>		<b>761</b>			<b>16</b>	<b>47</b>	<b>42</b>	<b>105</b>

※1 千葉県建築文化賞は、「景観上優れた建築物の部」及び「高齢者・障害者等に配慮した建築物の部」の2部門への表彰制度として平成6年度に創設。  
 ※2 第3回(平成8年度)に「建築文化奨励賞」を新設。  
 ※3 第5回(平成10年度)に「環境に配慮した建築物の部」部門を新設。  
 ※4 第12回(平成17年度)に「高齢者・障害者等に配慮した建築物の部」から「ユニバーサルデザインに配慮した建築物の部」へと部門の名称を改称。  
 ※5 第20回(平成25年度)に「景観上優れた建築物の部」、「ユニバーサルデザインに配慮した建築物の部」及び「環境に配慮した建築物の部」の3部門から「一般建築物の部」及び「住宅の部」の2部門へと部門を再編。  
 ※6 第21回(平成26年度)より「建築文化賞」及び「建築文化奨励賞」から「最優秀賞」、「優秀賞」及び「入賞」へと賞の区分を再編。

## 受賞作品の位置





チーバくん

千葉県建築文化賞は、多くの皆様の協力に支えられ、回を重ねてまいりました。  
その間、県下の広い地域にわたり、延べ207(奨励賞を含めると267)の建築物が受賞され、  
それぞれの地域に根付いています。  
第33回の作品募集は、令和8年夏頃行う予定です。皆様方の御応募をお待ちしております。

## お問い合わせ先

### 千葉県県土整備部都市整備局建築指導課

〒260-8667 千葉市中央区市場町1-1 TEL.043(223)3180 FAX.043(225)0913

### 一般社団法人 千葉県建築士会

〒260-0013 千葉市中央区中央4-8-5 TEL.043(202)2100 FAX.043(202)2101

## 後援

(公社)千葉県建築士事務所協会

(公社)日本建築家協会関東甲信越支部千葉地域会

(一社)日本建築構造技術者協会関東甲信越支部JSCA千葉

(一社)千葉県設備設計事務所協会

(一社)日本建築学会関東支部千葉支所